

戦争中の体験を語る集い

2011. 11. 12 (土) PM1時～

コミュニティーセンター月愛

参加者・・・体験を語っていただいた方々

S・Kさん(86歳男性)、N・Hさん(78歳男性)、I・Hさん(81歳男性)

O・Yさん(90歳女性)、K・Yさん(81歳女性)、O・Sさん(77歳女性)

M・Mさん(78歳女性)

お世話していただいた月愛自治会の方々

A・Nさん、I・Kさん、Hさん

ピース八幡

会長、事務局長、司会

計13名

会長挨拶

自治会長を辞めて、八幡市非核平和都市推進協議会の会長を勤めています。

元八幡市長の西村氏が昭和57年、京都府下で初めて非核平和都市宣言をして、初代の会長に就任し、平和と福祉を重要課題と位置づけ活動を始められました。

その後、八幡市非核平和都市推進協議会は、平和の折り鶴の活動、中学生のヒロシマ派遣を中心とした事業、アンネのバラを植樹する事業を進めてきました。過去には、平和に関する映画会の開催なども行なってきました。

ピース八幡の活動をより広く市民に伝える手段のひとつとして、ホームページを開設しました。また、この会でしかできない活動、今でしかできない活動として、今回の「戦争中の体験を語る集い」を企画しました。戦争、戦後を生き抜いてこられた方々の高齢化が進み、この貴重な体験を語る方がぐんと少なくなってきました。この集いを第一歩として、これから、市全域に「戦争中の体験を語る集い」の活動を広げていきたいと思えます。

事務局長

ヒロシマへ中学生を派遣して、実際に原爆の被害に遭われた語り部の方にお話を聞いています。もう、語る人がいなくなるのではないかとされています。戦争でひどい目に遭われたのは、ヒロシマやナガサキの方だけでなく、全国におられるのです。このように戦争の体験を語っていただける機会は、ほとんど無く、家族の間でさえ、そういうことは喋らない。辛い思い出ですので、多分、そうなるのではないかと思います。戦争中の体験を語っていただける方が地元におられるのに、このまま時代を過ごしてしまっているのか。次の世代を担っていく若い世代の人に、同じ過ちを二度と繰り返さず生きていける社会を作るためには、皆さんの力が、まさに必要だと思えます。

S・Kさん

仙台出身、徴兵後、3ヶ月の訓練を受け、昭和17年5月頃、ラバウルに転属。航空隊に所属していたときは、対空、対戦艦の場だった。その後、歩兵として参加しました。周りの人を笑わせることが多かった。弁当を取られた、進級するのに苦労したこともありました。

毎朝、敵の飛行機が百機ぐらい、ハエのように来て、爆撃して銃撃して来る。

その際、戦闘機の操縦席が見えるまで、接近してくる。ヤシの木が25m位あるのですが、その葉っぱが落ちるくらいまで、低空飛行して、射撃をしてくるのです。射撃をしてくると、私たちは、逃げたんですが、3年半の経験から、射撃をしてくると、一か八か、逃げずに隠れて、やり過ごし、飛行機の来た方へ逃げるようにした。そのほうが、助かる率多かったですね。

18年の9月頃から、爆撃がひどくなりました。そこは、アメリカ軍じゃなく、オーストラリア軍が攻めてきたのですが、ラバウルには、日本軍が10万人いると伝えられていた。

それで、上陸すると多数の犠牲者が出るということで、艦砲射撃、飛行機による機銃射撃が多かった。その当時、日本軍は、20～30機、飛行機を持っていたのですが、2、3日で全滅した。

3年半で、軍曹近くまでなった。わたしの名前を知らない人はいないくらいだった。

戦争で死ぬ人よりも、マラリアで死ぬ人の方が多かった。3日熱、天狗熱なども多かった。3日熱は、軽いほうだが、熱が出ている人は、震えが止まらず、押さえつける人を払いのけるほどでした。2時間ほど汗びっしょりになって、やっと熱が引いていく。

爆弾の中には、瞬発爆弾と時限爆弾があり、瞬発爆弾は、板にぶつかっただけでも爆発し、人畜を殺傷するための爆弾で、時限爆弾とは、家を突き抜け、地中まで潜って爆発するもので、建物を吹き飛ばすための爆弾です。ほかにも手榴弾などがあります。

ラバウルでは、1万人単位で捕虜になった。収容所でマラリアなどに罹って死んでいく人が多かったので、気落ちしている兵隊の為に演芸会をしてどうかと提案した。人気者になった。

O・Yさん

父母は、山形県民だった。

家族で台湾に渡り、住んでいた。そこで、戦争が起きて、わたしたちも防空壕へ入りました。人間だけでなく、野っばらで、馬や牛などの家畜さえも機銃掃射を受けて、殺されるのを見て動物好きの姉がで、ワ～ワ～と泣き出したりすることもありました。

父が台湾で兵隊に取られたのですが、弾に当たらず、無事に帰ってきました。

台湾でも空襲があった。自分たちで防空壕を作って、空襲警報がなると、すぐに防空壕に入った。小さな子にも「帽子、帽子」と言って、防空頭巾をかぶらせて逃げていた。お砂糖、お米、メリケン粉まで、何でも配給でしたね。なんとか無事に戦争が終わって、戦後の引き上げになりましたが、船の中でも食べ物がない。赤ちゃんに飲ませる母乳も出ないとコックさんに迫った。それで、なんとか食べ物がもらえた。また、お風呂に入れられないから、ホウ酸を含ませたカット綿で子どもをきれいに拭いてあげた。引き上げた港にお姉さんが迎えに来てくれて、「この子、昨日、お風呂に入れてあげた？」と聞いていました。あまり、綺麗にだったから・・・

K・Yさん

16、7歳、今でいえば高校2年位の時、学徒動員。

大阪の中西航空で、海軍の戦闘機“紫電”の尾翼を作っていた工場で働いた。わたしが行った時は、終戦間近だったので、材料がないので、勉強もできないし、仕事の方もあまりできませんでしたね。「これでは、ねえ」とその時から思っていました。

一年上の人は、ネジを作る工場へ行っていました。女の子たちは、全寮制で、すぐに、ホームシックに罹り、工場から駅に入ってくる汽車が見えると「早く、家に帰りたい」といつも、言

っていました。男子生徒は、戦争へ行く人を見送るとき、「貴様と俺とは、同期の桜・・・」と、よく歌っていました。それをわたしたちは、ぽか〜んと見ていました。

「男女7歳にして、席を同じくせず」の時代だったので、そばへ行ったら、怒られるから、そばへも行けなかったのですよね。

学徒動員で親から離れて出て行った人の中で、どれだけの人が親の元へ帰って来られたのだろうと思うと、涙が出ますね。

I・Hさん

戦争中、戦後の出来事を自分の子どもたちにどれだけ伝えられるのか疑問。

子どもや孫に言うと、「こんなことがあったねん。だから、ご飯を絶対に残せへんねん」と言うと、「時代が違う」と避けてくる。どうしたものかと思えますね。

戦争中、「皇国は、不滅だ。」といった先生が、戦争で負けると、今まで鼓舞してきたことと全く反対のことがまかり通る。凄いなと思ってしまう。

毎日、食いたいと言う気持ちで、いっぱい、天皇さんがどうか考えることはなかった。

ところが、「武士は食わねど、高楊枝」と言っていた先生が、戦争が終わると、コロッと変わってしまう。あれには、恐れ入りましたね。それを子どもや孫に言うと、やはり、伝わりませんね。

N・Hさん

戦争が終わったのは、中学校に入った年でした。

ほとんどが軍需工場に行っていました。

西宮にいた頃、6月に近所、それから、学校も空襲でやられて、わたしの家がやられたのは、広島に原爆が落とされた前日の8月5日でした。

自宅に1日、1ダースの爆弾が落ちた。田んぼにも焼夷弾がいっぱい落ちていました。

焼夷弾が落ちると、砂をかけて消せと言われていましたが、そんなことは、できません。

何にも持ち出すことができません。焼夷弾は、屋根を突き抜けて、防空壕に入っていた近くのおばさんに当たった。家が焼けて、それから辛かったですね。知り合いの家に間借りしても、2、3ヶ月したら、出てくれですわ。1年ぐらいで、4、5軒回ったですね。やっと、市営住宅（6畳と3畳）に入って、ほっとしました。

自宅近くに高射砲があり、爆弾がしょっちゅう落ちていました。流れ弾が近所に落ちてきました。戦争の初めは、高射砲が敵機に当たっていたが、終わり頃には、1万m程の高さを飛ぶようになったため、当たらなくなっていた。

O・Sさん

わたしは、向日町の方に住んでいました。

兄は、早くから戦争に取られていました。

わたしが4年生ぐらいの時、父が舞鶴へ徴用で行った。残ったのは、母と病弱な姉とわたし、3人だったのですが、本当に食べるものがなくて、100坪ぐらいの畑があったので、そこでお芋や麦を作って、それを収穫して食べていました。たまに配給を頂くことができました。父が徴用で行く時、「あと、女ばかり残るので、あとを頼む」と声かけをしてくれましたので、農家から、ちょこちょこ差し入れをしてくださった。しかし、病弱な姉に食べさせることが重要でし

たので、母とわたしは、朝、昼、晩糠を炒って食べていた時が続きました。。そのため、何か身体がだるいなと思って、病院に連れて行ったら、脚気と言われた。お薬は、ないということで、田んぼでイナゴを取って、1日、生かしておくで糞をするので、その後食べるという生活をしてきました。戦後、食べ物の調達が一番辛かった。庭で芋を作って食料にしていたので、それをお弁当にも持って行きました。美味しかったですよ。それしかないんやからね。

N・Hさん

あの頃は、食べ物がなかったので、何でも美味しかった。

M・Mさん

わたしは、終戦時、小学校6年生でした。

その頃は、集団疎開がありました。

母が集団疎開は可哀想だということで、わたしは、叔父の家に縁故疎開に行きました。

辛いし、家に帰りたいと思って、お金だけ持って、電車を乗り継いで、疎開していた三木市から梅田を通して、自宅のあった上本町まで帰って来たことがあった。

どうやって帰ってきたかわからない。ただ、家が恋しくて帰ってきたが、近くに爆弾が落ちて、また、疎開先に行かなければいけなくなった。疎開先のすぐ上の鈴蘭台の別荘地が燃えて、本当に怖い思いをしてきた。よく頑張ったと思う。戦争中、居候した叔父の家でも辛かった。

K・Yさん

挺身隊でたくさんの方が来ていらっしやったのですが、頭を坊主にした女性が多かった。

「何であの人、坊主やの」と聞いたら、「戦地に行った夫や許嫁が死んだため、二度と夫を持たないということで、頭を丸めたんや」と言う人がいた。

M・Mさん

当時は、物々交換が主だったが、それでも、最後、お米も分けてもらえず、みかんの産地でみかんをもらって帰る。腹が空いているので、帰る道でみかんを食べて、帰り着くまでに半分になっていたこともあった。それでも飢えはしのげましたけど・・・

電車は、窓は無く、みんなそこから乗り降りでした。すごかったですよ。

見渡す限り、一切建物は無かったですね。

今の近鉄百貨店の辺でしたが、戦後、進駐軍が道路を300台以上のジープも通っていくので、道路を横断するのに1時間以上も待たされる事があった。

夜は出歩いたらあかんと言われていました。

戦後の食糧難の時、豆カス（豆の油をしぼったあとの物）、りんごを小さく切って乾燥した物、乾燥バナナなど食べました。あと、難波吉備（とうもろこしを絞ってカス）は、本当にまずかった。豚でも食べないものまで、食べていましたね。

Hさん

戦争が終わった時は、2歳だった。わたしが住んでいた富山では、戦争の被害は、なかったし、食べ物に困ったこともありませんでした。

会長

芋の葉っぱ、疎開している時に、蓮の実なども食べました。

戦後は、団子汁、よく食べました。定番でした。

K・Yさん

桑の実を食べていた。桑の実をポケットに入れて帰るとポケットが真っ黒になった。

O・Yさん

戦争が終わって、まだ、台湾にいたとき、夜8時頃、兵隊から帰って来た主人に頼まれて、仕事場まで書類を届けに行ったとき、道を歩いて、誘拐されそうになって、近くの家で「助けて」と飛び込んだ。その時は、本当に怖い思いをした。

I・Hさん

当時、台湾人は日本人をどう思っていたのか？

O・Yさん

台湾は、当時、日本からたくさん的人が行って住んでいた。

しばらく、怖くて外に出られませんでしたね。

K・Yさん

親日家が多かったのでは・・・

O・Yさん

戦後、台湾で映画館に行ったら、「こっちに入って」と言われ、個室のようなところへ通されて、見た映画は、日本軍がシンガポールに進行する場面ばかりで、わたしたちへの当てつけのようだった。いたたまれなくて、慌てて出てきました。

会長

戦争が終わって、ほっとした。まず、空襲警報がなくなったことが嬉しかった。

M・Mさん

それまで、空襲警報がなると、電球の傘に黒い布を被せて、明かりが外に洩れないようにしてましたね。

N・Hさん

警戒警報が終わると、帰りにおやつをもらえるのが嬉しかった。終戦近くなったら、ほとんど、勉強はしてなかった。

I・Hさん

小学校に中学校が間借りしてしていたので、半分ずつなので、週3、4日しか学校に行っていなかった。

会長

本当に、ほとんど、勉強していませんでした。

O・S さん

学校に行っても、畑の耕しとかばかりでした。
小学校で、何を習ったか思い出せない。

K・Y さん

何か、一生懸命生きたという思いがある。

O・S さん

年代が同じだから、話が合う。楽しいね。

会長

こんな話は、なかなか家ではできません。

玉音放送が流れ、終戦を迎えた時の思い

S・K さん

ラバウルで終戦を迎えた。終戦の1週間前には、負けるとわかっていた。

日本が負けたらどうしようと言っていました。

わたしは、以前から敵の捕虜を大切に扱ってきたから、終戦を迎えた時も大切にしてくれた。

「あんた、病気だから」と軽い仕事を回してくれた。それでも、「病気じゃない」と言ったら、

「穴掘りをしろ」と言われた。穴を掘り終わったら、「埋めろ」と言われた。

次は、楽な仕事で、炊事班に回された。

上官は、日本が戦争に負けたとは言わなかった。

捕虜たちの方が先に知っていた。

O・Y さん

戦争に負けたとき、「いつ、引き上げる」という話ばかりでしたね。

「これから、大変やね」と言われた。どのように日本に帰るかが大変だった。

K・Y さん

玉音放送は、学校でかたまって先生と一緒に聞きましたね。何なのか分からなかった。しかし、これで、疎開先から家に帰れると思うと嬉しかった。

N・H さん

わたしは、中学校のときでしたが、玉音放送は、聞いていない。しかし、日本は戦争に負けると思っていた。B29 が来て、下で逃げ回っているんだから・・・

I・H さん

わたしは、戦争に負けると思っていなかった。当時、兄弟4人で島根県の石見の叔父の家に縁故疎開していました。新聞が3日ほど遅れていた。麻の収穫時期に当たっていて、百姓さんは忙しかった。新聞を見たが、終戦がピンと来なかった。

帰りしな、山陰線で大阪まで帰るとき、出雲の駅で汽車のデッキで20歳過ぎの若い兵隊さんが大きなリュックを背負って、「誰か故郷を思わざる・・・」歌っていた。そこで、ふるさとはいいなと痛感した。

O・Sさん

今日は大事な放送があるということで、ラジオの前にいた。母と姉とわたし3人で聞いたんですが、「ああ、戦争が終わったんやな」という感じで、終戦で、兄弟が帰ってくるということが嬉しかった。戦後、進駐軍が怖くて、夜は、鍵をかけてきちっとしとかなあかん。家族は蔵の中で寝ていた。その晩、「帰ったぞ」と声がした。「お兄ちゃんの声に似ているな」ということで、3人揃って出てみると、沖縄に行ったと聞いていた兄が帰ってきた。通信の仕事をしていたので、戦争の書類を全部焼却して、帰ってきたと言っていた。びっくりしましたね。終戦がもう少し遅れたら、帰って来れなかったかも知れませんね。

会長

小学校の時、学校で先生と一緒に聞きました。意味はわかりません。

『「アメリカ人が来るから、チューインガムをくれ」と絶対言ったらダメ、殺される』と言われましたね。その言葉を強烈に覚えていますね。

沖縄の人と日本本土の人の意識の違い、沖縄の人は、市街戦が行われた6月が終戦だと思っている人が多い。また、沖縄の犠牲の上に、平和が訪れたと思っている人が多い。

「終戦日、子ども心に ホットした」妻が詠んだ川柳です。
戦争でご苦労された生き証人の言葉を伝えることがいかに大切かといつも思います。
正しい事実を正しく伝えていくことが大切ですね。

————— 終戦後の苦労話 —————

会長

わたしも神戸で苦労しました。

カンテキ（コンロ）、米穀通帳、雑炊、証紙、戦争中によく使われていた言葉です。

兵隊さんは、1日、38銭もらったが、捕虜期間は平和だからということで、1銭も無しだったと聞いた。

O・Sさん

ほんと、配給でよく並びましたね。戦後まもなく、デノミがあって、例えば、100円が1円の価値しかない状態になる。

会長

僕らの年代では、何銭でしたね。

S・Kさん

一日の給料が、38銭でしたね。

みんなに「恩給をもらっているだろう」と言われるんですが、終戦後の捕虜の年月を除くと実際に兵隊として過ごした年月が短いので、恩給もつかなかった。

「天皇陛下、ばんざい！」と言って死んでいった兵隊は、一人も見ることが無い。
また、父親の名を呼んで死んだ人もいない。みんな、女性の名ばかり、母親や妻、子供の名であった。

会長

やっぱり、お腹を痛めて産んだお母さんにはかないません。母は偉大だ。
戦争に負けて悔しいと思いませんでしたね。小さかったし・・・嬉しかったですね。

M・Mさん

組長さん、怖かったですね。防空訓練にでなければいけなかったし・・・バケツリレー
その時は、必死でしたが、今考えると、「なんだったんだろう」と思いますね。

体格が大きいだけで、実際には、進駐軍が怖いと思ったことはなかった。

でも、進駐軍の人が日本の女の人と肩を組んで歩いて行くのを見て、親が嘆いている姿をよく
見ましたね。

戦後、家の中で不発弾が見つかって、撤去してもらいました。もし、爆発したら、家が吹っ飛
ぶと言う怖い思いもしました。

当時の防空壕は、家の床下、20～30cm、土を掘って作ったもので何の役にも立たなかった。

本当の戦争は、映画のものより、もっとひどかった。

よう、生きてきたと思います。

今の若い人への思い

S・Kさん

今の若い人に何を言っても、わかんない。無駄なこともある。「時代が違う」と一蹴されてし
まう。

N・Hさん

しつけがなってないですよ。

当時は、食糧難で何でも食べていた時代だから、今とは違うことも分かるが・・・

会長

「これが嫌い」と言えば、それを必ず食べさせられましたね。食べるまで、親が言っていまし
た。孫に言う「時代が違う」と言う。

I・Hさん

食糧難で嫌いなものが無くなった面もありましたね。

今は、何でも売っている時代。

N・Hさん

食べ残すと、「もったいないから」と言うのですが、娘の代になると、「しんどい目をしてまで、
食べんでもいいよ。身体を壊したら何にもならないから・・・」と言います。

会長

お百姓さんが一生懸命育ててくれたお米なんだよ」と子どもに言ったら、それから、食べ残し
をしないようになったと聞きましたね。

しかし、今は、就職難で若い人も大変。昔は、90%以上、就職できたのに・・・

O・Sさん

沖縄のことを考えても、何で、あの大東亜戦争を始めたんだろうねと思いますね。

もう、起こして欲しくないですよ。

平賀さん

原子力は、怖い。貢献もしたけど・・・東北の方、大変ですよ。

I・Hさん

除染だと言っているんですが、それは、どこに捨てるんでしょうね。

年寄りも、気にしてはダメ。人間は、忘れるから生きていられる。